

令和 6 年 2 月 22 日

## 教 育 長 樣

研究コース	
B	グループ研究B
校園コード（代表者校園の市費コード）	
511001	203

代表者	校園名 :	大阪市立堀川小学校
	校園長名 :	衣笠 博政
	電話 :	6358-3336
	事務職員名 :	西 麗美
申請者	校園名 :	大阪市立堀川小学校
	職名・名前 :	首席・流田 賢一
	電話 :	6358-3336

## 令和5年度 「がんばる先生支援」研究支援 報告書

◇令和5年度「がんばる先生支援」研究支援について、次のとおり報告します。

6 成果・課題	<p>大阪府教育振興基本計画に記載されている、<b>子どもたちが力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</b>について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それらからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。</p> <p><b>【見込まれる成果1】</b></p> <p><input type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上  <input type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>ポートフォリオ作成により、児童の学びの方向性がはっきりとする。単元末には学んだ内容と次への学び方を振り返り、自らの学びをメタ認知することができる。学び方を変革することで、児童の学力が向上する。</p> <p>《検証方法》</p> <p>経年調査国語科の「基礎・活用」(学力)で大阪市平均を超える。学びを振り返り「自分には力がついた」(学力のメタ認知)「今までの学習を思い出し、活用できないかと考える」(既習の活用)と回答する児童の割合が8割以上となる。</p> <p>〔検証結果と考察〕</p> <p>経年調査国語科正答率「合計」+1.8(昨年+7.4→今年+9.2:以下同様)。詳しく分析すると「基礎」+0.4(+7.6→+8.0)、「活用」+5.1(+6.8→+11.9)であり大阪市平均を超え、昨年の結果も超えている。児童アンケートの肯定割合「自分には力がついた」100%、「今までの学習を思い出し、活用できないかと考える」88.5%と8割を超えた。児童が学力を認知した自らの学力向上の自覚と調査結果とが一致している。これは、国語科は系統が見えにくい課題のある教科であるが系統を意識し、指導したことと学習の中で学んだ内容を抽象化し、学びを転移できるよう工夫したからだと考える。児童アンケートには、理解に関して「テストの点数が上がった」、系統に関して「要約をくり返し学習しできるようになった」、協働や学びの意識の変化に関して「苦手だったけど、友だちと学習して分かるようになった」「学習が楽しくなった」とある。学びの始め、中間、終わりの3段階で自らの学びを見通し、振り返る機会を設定することで、認知し、学びの理解や意欲向上につながっていると考える。</p> <p><b>【見込まれる成果2】</b></p> <p><input type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上  <input type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>国語科の個別最適な学びとは、共通のゴールに向かって自ら決めた方法により読み深める学びである。自ら選択・判断・追究することは、児童の意欲の向上、学ぶ力の向上につながる。受け身の学習ではなく、自ら学習するためポートフォリオを見返しながら学びを調整する姿も期待できる。子ども主語の学びは、学びの楽しさを実感することができる。</p> <p>《検証方法》</p> <p>経年調査国語科の「主体的に学習に取り組む態度」が大阪市平均を超える。児童アンケートの「課題解決に向けて最後まで取り組んだ」「どう学んだらいいかを考えた」「問題に出会った時に問い合わせ持ち、考えることができた」「学ぶことは楽しい」の割合が9割以上になる。</p> <p>〔検証結果と考察〕</p> <p>経年調査国語科正答率「主体的に学習に取り組む態度」+9.4(昨年+2.2→今年+11.6)となり、大阪市平均を超え、昨年平均も大幅に超えた。児童アンケート肯定割合「課題解決に向けて最後まで取り組んだ」100%、「どう学んだらいいかを考えた」96.2%、「問題に出会った時に問い合わせ持ち考えることができた」96.2%、「学ぶことは楽しい」96.2%となり9割を超えた。個別最適な学びの学習形態は初めてであるが、文科省の言う多様な子どもたち(学力・特性・環境・興味等)が主体的に学ぶための教育改革につながっている。研究1年目であるため十分ではないが、児童の学び方が変化し一定の成果が調査結果やアンケートから読み取れる。アンケートには「みんなで話し合い、学ぶことで交流を深め、楽しくお互いに頑張って学習することが大切だと思った」「一人一人の問い合わせ、みんなで解決することがとても楽しかった」と個別の問い合わせと協働の学びが学びの楽しさにつながったことが分かる。これは教材に出会った際、各自が問い合わせ、学ぶ目的・学ぶ必然性を設定したことが要因だと考える。</p> <p><b>【見込まれる成果3】</b></p> <p><input type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上  <input type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>教科の本質、教材で学ぶ本質を見極めることでシンプルな授業展開となるため、教材分析力が向上する。大学教員や先進的研究校教員から今後求められる指導について学ぶことができ、児童主体の学びへと転換することができる。理論と実践をつなげて学ぶことができるため、児童の具体的な姿をもとに研究を進めることができる。</p> <p>《検証方法》</p> <p>研究メンバーへのアンケート結果から、指導力の向上についての肯定的割合が9割以上となる。公開授業研究会では、実際の児童の学びを見てもらい参会者の満足度が8割以上となる。系統を意識した学びを提案し、研究会への複数回参加者の「系統を意識した授業を実践している」の割合が向上する。このことで研究の広がりを検証する。</p> <p>〔検証結果と考察〕</p> <p>研究メンバーの指導力向上の肯定割合は100%であった。理由は、年度始めは未知数であったが、個別最適な学びと協働的な学びの単元への位置付けが読書会や講師先生からの理論研修、実践を重ねながら研究テーマに合う授業モデル案を提案できることが要因である。このことにより、授業展開はシンプルなものとなった。公開授業参加教員の満足度は100%であったのは、児童の主体的な学びの姿と教材分析や授業提案、単元モデルの提案が好意的に受け入れられたことが参加者アンケートから分かった。理論と実践を往還した研究の成果であると考える。また、副題にある「系統を意識した授業を実践している」の肯定割合は研究会1回目78.9%→2回目82.6%であった。複数参加者にしおって分析すると1回目82.3%→92.7%と大幅に増加し、研究発表や実践から系統指導の重要性が伝わり、研究が広がりを見せたと言えるだろう。</p>
---------	--

6	成果・課題	<p><b>【見込まれる成果4】</b></p> <p>□ 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 □ 教員の資質や指導力の向上</p> <p>国語科での個別最適な学びの実践例が少ないため、本研究会での実践例提案や研究授業での提案を参考に実践が広がる。単元のどこに個別最適な学びを位置付けるかや、児童の学びの方法を分類整理する。研究会で以上のこととを提案し、参会者に個別最適な学びが広がっていく。</p> <p>『検証方法』</p> <p>教科の本質、教材で学ぶ本質をまとめたものを研究会で参会者に配付する。参会者アンケートの「自らの実践に活用したい」が8割以上となる。そして、研究会への複数回参加者の参会者アンケート「個別最適な学びを実践している」割合が向上する。このことで研究の広がりを検証する。</p> <p>〔検証結果と考察〕</p> <p>公開研究会では、本時の指導案に加え、教材分析プレゼン、本時までの板書、児童のノートなど本時までの学びについても資料として配付をした。参加者からは「個別最適な学びのあり方を探るテーマが興味深かった。単元計画の中に個別最適な学びの時間と協働的な学びの時間を組み込むことや各児童が問い合わせをもつことが学びになつた」「個別最適な学びを模索していた。今回見通しを持つことができた。自分なりに研究していきたい」と好意的な感想が多く、アンケート「自らの実践に活用したい」の肯定割合は、は100%であった。副題にある「個別最適な学びを実践している」の肯定割合は研究会1回目52.3%→2回目59.0%であった。複数参加者にしぼって分析すると1回目67.4%→79.3%と個別最適な学びの実践に取り組む割合が大幅に増加しており、研究が広がりを見せたと言える。</p>
		<p><b>【研究全体を通しての成果と課題】</b> 研究発表会等で使用した資料や研究冊子から引用し、</p> <p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>○成果・読書会・理論研修を重ね、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実に向けた授業デザインの提案ができた。</p> <p>【協働】読みの土台→【個別】問い合わせの追究（選択可能）→【協働】学びの共有</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学ぶ必然性を生む問い合わせ、必要感のある協働の学びが学力向上・学ぶ意欲向上につながった。</li> <li>・教材分析と授業を同一教材で公開したことでのべ200名以上の参加者があり、本研究が参加者に広がった。</li> </ul> <p>●課題・個別最適な学びの本研究グループの定義を確立し、目指す子ども像を検討し具体的な提案につなげる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・個別最適な学びと協働的な学びのグラデーションを年間レベル、単元レベルで整理する。</li> <li>・学びの見通しの持たせ方。・価値のある問い合わせの設定、問い合わせの深化へつながる学びのあり方。</li> <li>・子どもの学びの自覚化を促す振り返りや自己評価・指導者評価のあり方。を検討する。</li> </ul> <p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>3. 継続研究（3年目）</p> <p><b>《代表校園長の総評》</b></p> <p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>個別最適な学びと協働的な学びは令和3年答申として示された。個別最適な学びは、まだ実践例は少ないが本グループは単元モデルを作成し提案をした。公開授業での児童の姿は、学ぶことを楽しみ、それぞれの児童が学びに向かう姿が見られた。研究1年目として学力向上や意欲向上の結果が得られたことは成果である。多くの参加者とともに研究を進められたことも研究のプラスアップにつながっている。今後求められる研究テーマに真摯に向き合い、研究を続けてきたことについてまとめることができた。研究に取り組む熱意を強く感じた研究であった。</p> <p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>3. 継続研究（3年目）</p>